

聖光学院中学校・高等学校

工藤誠一校長先生インタビュー

取材:2011年5月

JR根岸線の「山手駅」を降り、曲がりくねった坂道を上ること10分、目の前に広々としたキャンパスが広がります。そこが、「神奈川御三家」とも呼称される名門校・聖光学院です。周囲は閑静な住宅街が広がり、ほんの少し歩くだけで横浜の臨海地域が一望できるロケーション。今回われわれの取材に応じてくださったのは、聖光学院校長、そして、神奈川県私立中学高等学校協会の理事長も務めていらっしゃる工藤誠一先生です。聖光学院の教育について、身振り手振りをまじえ熱く語っていただきました。

矢野「自由が丘近辺では、最近、聖光学院をはじめ、横浜方面の学校を志望する受験生が多くなっています。聖光学院が他校と違うところ、つまり、御校の特色を教えてください。」

工藤校長先生「横浜の中心地にある男子校は本校くらいです。そして、カトリックのミッションスクールであるわたしたちは『次代のリーダー』をつくらうという気持ちを第一にしています。よって、単に進学指導に留まらず、学校のカリキュラムそれぞれが将来につながることを意識しています。そのために、本校では情操教育に力を入れています。たとえば、選択芸術講座と聖光塾。選択芸術講座は中学校2年生のときに1年間通じておこないます。子どもたちが20人くらいのグループに分かれて、バイオリンやクラシックギター、フルート、陶芸、木工、書道、絵画、演劇など…。そして、学んだ成果を発表する場も設けています。一方、聖光塾は学年を超えて自己啓発型学習をさせる場です。理科の実験教室や里山の自然、釣り、英語劇、解剖実習、ロボット製作など。中学校3年生になるとそこからさらに派生して、社会科演習という実地体験を試験休みや日曜日を利用しておこなっています。軽井沢で人間と野生動物の共生について実地調査をおこなったり、つくばに行って、研究都市の施設を見学、最先端

の技術を体感したり、ほかにも多種多様な講座を開設しています。この二つが本校の教育上、大きな柱になっており、本校の目標であるリーダーシップの養成する場として機能するでしょう。こういう試みがおこなえることこそが本校のパワー、活力であると自負しています。ちなみに、宿泊行事が多いのも本校の特色のひとつです。特に中学校3年生と高校1年生では集中的に宿泊行事を設けています。この2年間は中高6年間の『中だるみ』に当たる時期で、そこに非日常性の空間を提供することで子どもたちを刺激する。これはとても大切なことと考えています。

もちろん、それらの教育のバックボーンにはカトリックの精神が脈々と流れています。わたしたちは子どもたちを共同体の構成メンバーのひとりとしてとらえているので、子どもたちやご家庭が困ったときには必ず手を差し伸べますし、たとえ子どもたちに裏切られるようなことがあったとしても、愛し続ける。その気持ちはどこの学校にも負けません。だから、子どもたちを途中で放り出すようなことは一切しません。ちなみに、わたしが校長に就任してから、留年するような子どもは出していません。『入学してついていけなかったらどうしよう』と思う方もいらっしゃるかもしれませんが、たとえ成績的に厳しい子であったとしても、そういった子どもたちだけをセミナーハウスに集めて卒業生が面倒を見るという試みもおこなっています。」



矢野「新校舎建築の着工が昨日はじまったそうですね（注：取材日は5月26日）」

工藤校長先生「新しい校舎づくりのテーマが『文化を創る100年建築』です。私学の役割としてはその地域にあって、文化を発信することだと思っています。たとえば、私学の特長として『人が変わらない』ことが挙げられます。わたしも聖光学院の卒業生で、教師になって33年目を迎えるのですが、わたしの恩師の先生たちがブラザーを除いても5人聖光学院で教鞭を執っています。公立の学校では必ず人事異動がありますよね。ところが、私学はそれがない。だからこそ、聖光のDNAが脈々と受け継がれていくのです。それが、子どもたちの心の原点としての学校という共同体の存在を成り立たせるのです。大きな講堂をつくって、そこでおこなうコンサートを公開したりとか...新校舎建築にともなって、先ほどお話しした『聖光のDNA』を地域によりいっそう発信できるようにしたいと望んでいます。」



矢野「聖光学院というと進学校のイメージが強かったので、校長先生のお話はとても新鮮です。」

工藤校長先生「もちろん、本校は子どもたちにしっかり勉強させる学校でもあります。宿題もきっちり出しますし。塾通いも必要ありません。それぞれの教員たちが膨大な数のオリジナルの冊子やプリントを作成しています。本校には町の印刷所並の設備が整っています。わたしたちはマニュアルに即した指導をよしとしません。もちろん、それが教員の自己満足で終わることなく、出口（進学先）もしっかりしなければなりません。東大にある程度入ることも必要だし（注：2011年度は東大に60名合格）、ウチで二百番台の成績下位生であっても早慶に合格できるレベルであるべきだし、そのためには早慶ともに三桁の合格者を出し続けなければいけません（注：2011年度は早大に142名、慶大135名合格）。そのような進学結果を出し続けてこそ、学校に対する信頼感を子どもたちに持たせられるし、先ほど述べたようないろいろな試みができるのです。」

矢野「中学受験を経て入学してくる子どもたちに勉強面でどんなアドバイスをなさっているのですか。」
工藤校長先生「何よりも大事なのは学習する習慣を継続することですね。中学受験のために4年生・5年生から勉強を始めているのに、おそらく親御さんの中には子どもが中学受験で志望校に合格したら、



自由にしていいわよ、という約束手形をきっている方もいらっしゃるかもしれませんが...中学校に入ったらもうパラダイスだよと(笑)...とにかく、中学受験で身につけた学習習慣を続けないのはもったいないことです。本校では子どもたちに宿題をきっちり課すと言いましたが、(宿題の状況が)

おもわしくない子に対しては、居残りをさせたりします。宿題はどんどんたまって、結果として勉強自体嫌いになってしまいますからね。」

矢野「時代とともに入学する子どもたちの質に変化はありますか。」

工藤校長先生「相対的な部分でいうと、さほど変わっていません。これは、全体の中でどの学力層の子どもたちが進学するのかという側面においてです。が、ひとりひとりに目を向けると打たれ弱くなっている、ガラスのような子が多くなっているような気がします。しかし、わたしたちは子どもたちを神様から預かっているわけですから、そういう子どもたちをありのままに受け入れ、そして、社会に貢献できるような人材に育てていく。それが、わたしたちの使命だと考えています。」

矢野「工藤校長先生ご自身が聖光学院の卒業生ということですが、当時から変わらない聖光学院の教育とは何でしょうか。」

工藤校長先生「それは『紳士たれ(Be Gentlemen!!)』という教育方針です。わたしが中学生のとき、初代校長のブルーノ・カロン先生は、『みんな購買部に行って、靴と洋服を磨くブラシを買って自分のロッカーに入れておきなさい。そして、帰るときはブラシをしっかりとかけから校門を出なさい』と指示を出したんです。これは昭和40年代前半の話ですから、驚きですよ。その精神はいまでも続いています。」



矢野「工藤校長先生がお考えになる中高一貫校の魅力をお教えてください。」

工藤校長先生「中高一貫校の魅力...『息の長い教育ができる』ことにあります。6年間の中で子どもを育てる...わずか3年区切りの教育では決してできない奥行きを持った教育ができる、その分、子どもた



ちの心も育ちます。そして、わたしたち私学は20年、30年という物差しで子どもたちをみればいい。ずっと(教師たちは)変わらずにそこにいるわけだから。子どもたちは再びそこに帰ってくることもできますしね。その環境の構築こそが良質な私学の条件でもあるのだろうと考えています。」

矢野「本日はありがとうございました。」

校長先生のお話をうかがったあと、広報担当の吉岡敏子先生に校内を案内していただきました。在校生たちが生き生きと学校生活を楽しんでいる姿が印象的でした。